



死ぬ前に見る、夢なのかもしれない。

だって小さい頃から憧れていた、絵本の王子様が迎えに来てくれたのだから。

背景は遊具がほとんど撤去された公園で、うるさいだけの豪雨が地面をぬかるみに変えていて、ロマンチックさの欠片もないけれど、私に向かつて傘を差し出す男の人は、幻と錯覚するほど綺麗な顔をしていた。

「君……どうしたの？ 大丈夫？」

涙でぐしゃぐしゃになったみっともない顔を擦って、黙って首を横に振る。

目が合った瞬間、その人は息を飲んで、口元を手で覆ったまま固まってしまった。





しばらく、雨粒が傘を叩き付ける音だけが響く。

「——とにかく、こんな夜更けに女の子が一人では危ないよ。」

君、名前は？ 家まで送るから……」

ほら、と手を差し出してくれるけど、目を逸らすようにうつむく。

だって、私にはもう、帰る場所なんてない。

「アンタなんか産むんじゃなかった」と泣くママ、怒鳴るパパ。家にいられなくなつて外に飛び出しても、行く当てがない。ちっちゃい頃から、集団から弾き飛ばされて、隅っこでうつむいていた。誰にも選ばれない。私はいらぬ子。めそめそ泣けば、それはいじめのいい口実になった。



家でも学校でも、口角を無理に上げて、良い子を演じることが覚えた。

——私、大人しくしてるよ。笑ってるよ。だから嫌わないで。こっちを見て。

でも、年齢を重ねるにつれて、貼り付けた仮面のメッキは剥がれ、そこから出てきた私は表情を作ることができなくなっていた。

——そうだ、期待するから傷つくんだ。もう疲れた。誰にも愛を求めない。私も返さない。

「何だその目はッ！ その生意気な顔がムカつくんだよ！」  
そうやって、空気に溶け込むように、気配を殺して生きていたのに。

♡♡♡  
パアンツと頬が熱くなり、そのまま壁に吹き飛ばされた。

——なんで？ 私が何をしたっていうの？

私を見下ろすパパもママも、憎しみに満ちた目をしている。

——痛い。

頬の痛みを自覚した瞬間。

これまで閉じられていた蓋が、壊れる音が聞こえた。堰が崩壊したみたいで、感情の洪水が渦を巻いて私の中で暴れ始める。

「それ、なら、もう、わっ、わ、私……死ぬ！ 死ぬから！」

大雨の中、裸足で飛び出す。

決壊して止まらなくなった涙が、容赦ない雨水とともに耳の後ろに流れていく。

衝動的に口走ってしまったけれど、死にたい、消えたいとい



う気持ちは本物だった。

車の行き交う大通り、高いビル。全てが目について、「決行したとき」を想像して身がすくむ。

走り疲れて、ぺたんと座り込んだのは人気のない公園だった。こんなところにいたってどうしようもない。でも、全てどうでもいい……

雨が私を押しつぶすように更に激しくなつて、されるがままに手元を見つめていたとき。

ふと、冷たさが途切れて。

「君……どうしたの？ 大丈夫？」

その人が声をかけてきたのだった。





「その……行く当てがないのなら、君さえよければ、僕の家に来る？ あっ、もちろん、変なこととはしないよ。何もしない。こんなこと言っても怪しいだろうけど……でも、信じて。君を、このまま放っておけないだけなんだ」

高そうなズボンが汚れるのも厭わず、片膝をついて、目線を合わせてくれる。

その優しくて穏やかな声に、胸が震えた。

知らない人について行っちゃいけません。小さい子でも知ってる。でも——もう、いいや。この人が悪い人で、犯罪に巻き込まれても、その時はその時だ。

私がいなくなっても、悲しむ人はいない。最期に素敵な夢を見せてもらったんだって、神様に感謝しよう。





「ん……」

彼の手を取る。大きくて温かい手は、私の指先が触れるとビクッと揺れて、見上げた彼はえへへ……と照れた笑みを見せた。エスコートされて立ち上がりうとするけど、走り疲れた脚は震えてしまつて身体を支えられない。

「もしかして立てない？ ……おいで」

男の人は着ていたコートで私を包むと、そのまま抱き上げて歩き始めた。

「こんなに冷えて……可哀想に。家に着いたらお風呂に入ろう。温かい飲み物も用意するから」

温もりを求めて、すり、と頬を首筋に寄せる。彼はくすぐつたように笑つて、「可愛い……」と呟いた。





「君、名前は？ 僕は青野春」

答えると、彼は頷いて「綺麗な名前だね。君にぴったり」と言ってくれた。

「この、名前、あんまり好きじゃないの……」

「どうして？」

「だって……私のこと、嫌いな人が……パパが、付けた名前だから……」

歩みと共に揺れる心地よさで眠りに誘われながら、ぽつりと呟く。

「……そっか。歳はいくつ？」

半分目を閉じながら答えると、「そっか。僕の方がちよっとお兄さんだ」と深い声が鼓膜を震わせる。





「おにー……ちゃん？」

「うん」

「にいに……」

「ふふ、その呼び方、可愛いな」

どのくらい歩いたのだろう。

次に目を覚ますと、大きな白いお屋敷が広がっていた。

「街から離れてて、ごめんね。僕、在宅の仕事をしていて……  
ここに一人で暮らしているんだ」

「ひとり……？」

「ん、そうだよ。だから遠慮しないで」

揺れる木々の先に現れた邸宅は白亜の城のようで、本当に絵  
本の世界に連れてこられたようだ。

